

■岡本喜八『日本のいちばん長い日』（1967）

恒例のこととして、筆者は、毎年8月14日の午後10時頃からこの作品を見始めるようにしています。それは、成る可く事件の起こった時間帯に合わせて見たいという気持ちからですが。

そして、本作の中で、耳慣れない、気になる言葉が何度も出てきます。おそらく初めて本作をご覧になる方がいらっしゃれば、何のことだか分からないと思います。『ショーショーヒッキン』と言う言葉ですが「承諾必謹」と書きます。意味は「天皇の詔（みことのり）を承る際には、必ず謹んでこれに従うべきである」というものです。帝国陸軍の中でも陸軍士官学校から陸軍大学を卒業したエリートたる陸軍省軍務局軍務課勤務の佐官以上の青年将校たちが、「承諾必謹」を完全否定し、本土決戦を執行しようとした愚拳を描いたのが本作です。昭和天皇の終戦の御聖断が下ったにも拘らず戦争継続しようとするものです。しかも、実質的に天皇を人質にして。

岡本喜八監督が独自の素早いカット割りを用いながら、重厚かつ緊張感に満ちた日本の敗戦までの実情を描きます。岡本喜八氏は、1924年生まれで1945年に陸軍工兵隊に入隊、第一陸軍予備士官学校で終戦を迎えた経歴を持ち、所謂戦中派に属します。本作の前に戦争映画としては、『独立愚連隊』（1959）『独立愚連隊西へ』（1960）『どぶ鼠作戦』（1962）という一連の”戦争ウエスタン”と呼ばれた作品や『血と砂』（1965）といった作品を発表しますが、こうしたエンタテインメント性の高い作品から、本作の後同じ戦争を扱った作品でも極めて反戦色の強くメッセージ性の高い『肉弾』（1968）をATGで発表します。戦争という異常な状態を経験し沸き起こった怒りが、『肉弾』というシンプルでありながら胸を突かれるような作品を生んだものと考えられ、これこそが岡本喜八氏の本質的な戦争観ではないかと捉えられるのです。

原作は半藤一利氏（この原作が当時出版された際には、半藤氏名義ではなく大宅壮一編集として出ました。これは大宅壮一名義の方が本が売れると言う出版社の判断に依るものです。当時半藤一利氏は文藝春秋社の社員です）、脚本は橋本忍氏です。この8月15日未明までに起こったこの反乱劇は、本作より先に1962年『八月十五日の動乱』というタイトルで意外にも東映が映画化しています。監督は小林恒夫氏、シナリオを担当した高岩肇氏のオリジナル作品であり、鶴田浩二主演でした。本作に比べると規模的に小さいながら見せ場の多い戦争ミステリー的な佳作でした。

敗戦の年までを仮に旧昭和時代と呼べば、本作は旧昭和時代における帝国政府の意思決定機関としての脆弱さを露呈し、軍人という当時最も高度な教育を受けたはずの陸大でのエリートたちの社会性の欠如、想像力と洞察力、そして思考力の乏しさを明らかし、そのために国民がいかにそのツケを払わされたかを描いています。

ノンフィクション作家の保阪正康氏は、日本の場合は「将校は死なないことが前提にあった」と指摘し、「陸大で優等生だった東條英機は思想書や人文書をまったく読まずに生きてきたと秘書は証言する。だから人間の心理、文化や思想は皆目わからなかった」とあり、内大臣だった木戸幸一に何故東條にこだわったのか尋ねると、木戸は「こだわったわけではないが、東條は異様なほど権力と戦争指導にこだわった。なぜなら彼は華族になりたかったから」だといいます。日本陸軍の実情たるや実に寒々しいものだったのです。

さて、帝国陸海軍は敗戦をもって崩壊します。この作品で描かれているように、阿南惟幾陸相（三船敏郎）は割腹自殺を遂げ、反乱将校の軍務局の椎崎次郎中佐（1911年生 陸大53期 中丸忠雄）畑中健二少佐（1912年生 陸大53期 黒沢年男）も、また近衛師団の古賀秀正少佐（1919年生 陸大58期佐藤允）石原貞吉少佐（久保明）も自決します。この中で古賀秀正少佐は東條英機の次女を妻としていました。斬殺された森起近衛師団長（島田正吾）の遺体の前で自決したとされています。

また、生き残った将校たちのその後の生き方にも興味を引かれるところです。井上孝雄演じる竹下正彦中佐（1908-1989 陸大51期恩賜組）は、阿南惟幾陸相の義弟でしたが、敗戦後陸上自衛隊に入り、第四師団長から陸上自衛隊幹部学校校長を務め、自衛官としては最高の階級である陸将に就いています。そして、戦争継続を説いて回った高橋悦史の演じた井田正孝中佐（1912-2004 陸大55期）は敗戦後、在日米軍司令部戦史課勤務の後、電通に入社、総務部長を経て電通映画社常務に就任しています。敗戦後それぞれの人生を歩まれたことが判ります。

東宝は、本作品を契機に「8・15」シリーズと銘打って毎年のお盆興行として大掛かりな戦争映画を展開していきます。1972年まで本作を含め6本の作品のうち、岡本喜八監督は『激動の昭和史 沖縄決戦』（1971）で再登場、最後の作品は今井正監督の『海軍特別年少兵』（1972）でした。日本映画界にとって最も厳しい時期にあって、東宝は独自色を出したものと考えられます。

また、本作は2015年に原田真人監督（脚本も原田真人）でリメイクされましたが、前作の熱気と緊張感を上回ることが出来ず残念な結果となりました。敗戦後80年（この作品の場合70年になりますが）、軍隊経験者もさることながら戦時経験者も減少し、どうしても当時の将兵の挙措・動作にどうしても自然さが見られず、重々しさのみが目立ってしまい興醒めすることが多々あります。これも時代の流れだと思います。今年2025年は敗戦後80年ということで、さまざまな戦争を取り扱った作品が発表されています。世界の中でも今現在、空襲の恐怖に怯える人たちが数多くいます。そうした環境の中で、戦争経験を風化させないためにも、また巷間伝えられるさまざまな戦争史観に囚われることなく、歴史を直視し学習するためにも、映画に一体何ができるか問われているのではないのでしょうか。